

中島俊克先生の人と学問

岡 部 桂 史

中島俊克先生は、2018年3月をもって立教大学経済学部を定年退職されました。立教大学の在職期間は22年間におよびます。はじめに中島先生の略歴について触れておくと、1953年1月東京都に生まれ、1971年3月に東京都立青山高等学校を卒業され、同年4月に一橋大学経済学部に入學されました。1977年3月に同学部を卒業、引き続き、一橋大学大学院経済学研究科に進まれ、研究者への道を歩みはじめます。1981年10月から1985年6月までパリ第四大学に在籍され、博士号を取得されました。帰国後の1986年3月に一橋大学大学院経済学研究科を単位修得退学され、同年4月から1年間、一橋大学経済学部助手を務め、1987年4月に京都産業大学経済学部に着任されました。同大学の専任講師、助教授を経て、1996年4月に立教大学経済学部にも助教授として移られ、1998年4月に教授に昇格されました。この間、中島先生は研究面で最前線に立ち、教育面でも精力的にかつ懇切丁寧に学生たちを指導され、また学内行政でも重職を歴任されてきました。

私が中島先生に初めてお目にかかったのは、着任されたばかりの1996年4月のゼミナール面接の場でした。以来、第1期の学部ゼミ生として1996年から3年間、助手として2004年から2年間、教員として2015年から3年間、計8年間を立教大学経済学部で同じ時間を共有し、立教を離れている間も、同じ経済史・経営史を専攻する研究者として、学会を中心に、折に触れてその警咳に接してきました。私の限られた能力で、中島先生の歴史家としての深い知識・教養と、多彩かつ多方面にわたる学問的関心の全てについて、この短い小論でまとめることは難しいと感じています。私の知る限りの中島先生のお人柄を中心に置いて、先生の足跡をたどりながら、「人と学問」への接近を試みてみたいと思います。

1. 経済史家の道へ 学部から博士課程の時代

中島俊克先生がフランス経済史を専攻した理由は、退職にあたり大学院経済学研究会の紀要『立教経済学論叢』第85号（2018年3月）に寄稿した「経済史への想い 私の修業時代」で詳しく述べられています。寄稿の中で中島先生は、「今となっては確たる記憶がない」と語っていますが、母方の祖父が郷土史家で歴史が好きだったこと、加えてフランス映画を好み、大学入学前からフランス語も少し学んでいたことを踏まえれば、経済学部に進学後、フランス経済史を専攻することは、自然な成り行きだった様にも思われます。ただ人類学や社会学に興味

があり、一橋大学といっても、当初は経済学部ではなく、社会学部への進学を考えていた高校時代に思いを馳せると、後年における中島先生の経済学や経済史にとどまらない学際的な関心の広さと深さ、また全学共通カリキュラムにかけた情熱がうかがえるようにも思います。

学部選択に関しては、御尊父の「経済の方が潰しがきく」とのご助言（中島先生によれば「説得」）により、経済学部に入学しますが、ここで中島先生と経済史が会うこととなります。1971年の一橋大学は、大学紛争の記憶も生々しく、その余波からか、教員も疲弊し、若い中島先生にとっては、理論・政策系の講義は精彩を欠くように感じられたようです。その中で中島先生は、歴史に傾注していくこととなりますが、当時の一橋大学経済学部は、日本中世史の永原慶二（1922-2004）、ローマ古代史の渡辺金一（1924-2011）、中国史の中川学（1937-2004）、ドイツ中世史の山田欣吾（1930- ）など、錚々たる陣容を誇っていました。

ただ中島先生が経済史、とりわけフランス経済史という「潰しのきかない」（中島 [2018a], 1頁）分野を専攻したのは、留学中の山田欣吾に代わって一橋大学に来ていたフランス近代史の泰斗である遅塚忠躬（1932-2010、当時は東京都立大学人文学部助教授、後に東京大学文学部教授）に魅了されたためでした。遅塚は『岩波講座世界歴史』旧版（1969～71年刊行）に書き下ろした「経済史上の18世紀」（同17巻収録）をベースに講義を行い、中島先生はその議論の「スマートさに圧倒」（同上、2頁）されます。以来、中島先生ご自身の表現を借りれば、「経済史狂い」となり、カルロ・チポラ（Carlo Cipolla, 1922-2000）の *The Economic History of World Population*, Penguin Books, 1962やポール・マントゥウ（Paul Mantoux, 1877-1956）の名著 *La Revolution industrielle au XVIIIe siecl*, Genin, 1959（徳増栄太郎ほか訳『産業革命』東洋経済新報社、1964年）を原書で読み進めていくこととなります。

学部3年生となり、中島先生はゼミを選択する時期になりますが、当時の一橋大学経済学部には、近代西洋経済史の専門家が不在でした。そのため、当時の経済学部で近代西洋経済史を学びたい学生は、山田欣吾ゼミに所属しつつ、隣の商学部所属の米川伸一ゼミで学ぶことが通例となっていました。その頃、イギリス経済史を専門としていた米川伸一（1931-1999）の下には、湯沢威（1940-、学習院大学名誉教授）、鈴木良隆（1944-、一橋大学名誉教授）、和田一夫（1949-、東京大学名誉教授）など、後年の外国経済史・経営史をリードする俊英が揃っていました。ところが、その年に急遽、米川の英国留学が決まり、中島先生は工業政策の外池正治（1930-2010）のゼミに所属することとなります。

外池ゼミでは、イギリス中小企業論に関する英文輪読からスタートして、一橋大学伝統の実証主義を徹底的に叩き込まれます。ゼミ外でも、読書会を組織して、ボブズボーム（E. J. Hobsbawm）の *Industry and Empire : An Economic History of Britain since 1750*, Weidenfeld and Nicolson, 1968（浜林正夫ほか訳『産業と帝国』未来社、1984年）、を読み進めました。ゼミに入った頃の中島先生は、中川学の影響で当時流行の従属路論に惹かれていたそうですが、外池ゼミでの議論を通じて、当時の日本の社会科学をリードしていた大河内一

男 (1905 1984) や大塚久雄 (1907 1996)、高橋幸八郎 (1912 1986) の問題意識を学んでいきます。外池の指導により、イギリス産業史の中川敬一郎 (1920 2007, 東京大学名誉教授, 経営史学会第3代会長) や中川の方法論をフランスに適用した遠藤輝明 (1929 2004, 横浜国立大学名誉教授) など、後に中島先生の研究フィールドで大きな位置を占める産業史研究も吸収していきました。学部卒業論文では、ボブズボームの *The age of revolution, 1789 1848*, Weidenfeld and Nicolson, 1962 (安川悦子・水田洋訳『市民革命と産業革命：二重革命の時代』岩波書店, 1968年) を受けて、産業革命の英仏比較を選び、遠藤のフランス産業革命研究を参考にしつつ、フランスの木炭製鉄など、大学院での研究につながる研究に取り組みました。

2年間の大学院浪人を経て、中島先生は修士課程に進学しますが、本格的なフランス経済史研究を進めるべく、フランス語に堪能な渡辺金一の門下に入ります。大学院では、横浜国立大学の遠藤輝明の下にも通いながら、修士論文の準備を進め、産業革命期のフランス東部や中西部の森林地帯のみで展開していた石炭と木炭の双方を利用する小規模製鉄工場に焦点を当てます。東京大学経済学部図書館が所蔵していた『鉱山局統計』(1833~46年) を徹底的に読み込んで完成した修士論文は、一部が学会誌『社会経済史学』に「十九世紀前半のフランスにおける小規模製鉄工場へのパドル炉の普及」として掲載され、これが刊行された中島先生の最初の論文となりました。

博士課程進学後、東京教育大学から一橋大学に移った近代イギリス経済史の浜林正夫 (1925 2018) に指導教員を変更し、商学研究科の米川伸一にも指導を受けるようになりました。米川から早稲田大学の原輝史 (1943 2011) を紹介され、その原の導きで「フランス資本主義研究会」に参加したことは、中島先生の一つの画期となります。フランス資本主義研究会は、当時の若手フランス経済史家によって組織され、権上康男 (1941 , 横浜国立大学名誉教授)、廣田功 (1944 , 東京大学名誉教授) などがメンバーでした。ここで中島先生は、フランスの最新の研究成果を共有するとともに、当時の日本におけるフランス史研究で影響力の大きかった高橋幸八郎のいわゆる「高橋史学」を相対化する視点を学ぶこととなります。さらに原からは、原のフランス留学時代の恩師であるフランソワ・キャロン (François Caron, 1931 2014) を紹介されます。そして中島先生は、博士課程の終わりに、フランス政府給費奨学生として、キャロンが学科長をしていたパリ第四大学史学科博士課程に3年間留学することになりました。1981年9月、28歳の中島先生は日本を飛び立ち、パリに向かいます。

2. パリ機械工業史研究へ パリ留学時代

1981年から4年弱におよんだパリ留学は、研究者としての中島俊克先生を語る上で大きな転機でした。パリ第四大学での指導教員となったフランソワ・キャロンは、*“L’histoire de l’exploitation d’un grand réseau de chemin de fer : la Compagnie du chemin de fer*

du Nord de 1846 a 1937” (『大規模鉄道ネットワークの運営 1846年から1937年の北部鉄道』) で、パリ第十大学から博士号を取得したフランス鉄道業史のパイオニアでした。当時のキャロンは院生たちに公益事業の研究を勧めており、中島先生は2つのテーマ、フランス東部鉄道史とパリのガス供給会社の歴史を示されますが、製造業の歴史をテーマとしたいとすべて断ります。しかし、日本で研究していたフランス東部の木炭製鉄史の史料は戦災でほとんどが焼失し、博士論文のテーマとするには難しい状況でした。キャロンの助言を受けて、新たに定めたテーマがパリ市内東部の社会経済史です。現在は住宅地となっているパリ市内東部は、19世紀後半には金属機械工業の中心地として大きく栄えた地域でした。

研究の手掛かりとなったのは、キャロンより渡されたジェラルド・ジャックメーという若き研究者の博士論文でした。ジャックメーは博士論文執筆後、癌で急逝してしまい、この大部の論文は遺著となった研究でした。そして留学1年余りで、中島先生は研究対象を機械および機械部品製造業に絞り込みます。とはいえ、その研究は遅々として捗りませんでした。

中島先生が対象としたパリ市東部は、中小町工場の密集地であり、個別企業の一次史料は無く、二次資料としての行政や業界団体の実態調査もほとんど存在しない絶望的ともいえる状況でした。その中で中島先生は、当時刊行された『商工人名録』から対象地域の二千を超える機械関連工場の情報を書き出し、製品の変遷を追跡することから研究を進めていきました。問題となったのは、研究のベースとなる『商工人名録』の掲載率(補足率)です。掲載率が不明のままでは、経済史の実証研究として限界があります。そこで中島先生は、膨大な作業を経て、『商工人名録』の情報とパリ市史料館の営業税台帳を照合し、19世紀後半の『商工人名録』の掲載率が9割近いことを証明します。そのほかにも、国立公文書館に所蔵されていたパリ商事裁判所の破産文書を利用して生産設備の変化を明らかにするなど、さまざまな史料を駆使して学位論文執筆に邁進しました。

こうした奮闘にも関わらず、3年間の給費期間はあっという間に過ぎ、9ヶ月余りを自費で賄って、フランスでも最初の機械工業史研究となる博士論文 “*Industrie mecanique de Paris 1847 1914*” (『パリの機械工業, 1847~1914』) が完成します。当時の経済史研究を振り返ると、国際比較・関係史的視点から、西欧や北米における工業化過程の地域的差異、相互関連に関心が集まっていた時代でした。その中で各国・各地域での機械工業に関しても研究が活発化して多くの業績が積み重ねられていましたが、ことフランスに限っては技術史研究のみが存在するだけで、フランス機械工業史に関する本格的な研究は皆無でした。中島先生は日本人でありながら、フランスで未開拓であった研究テーマに切り込み、後の研究のメルクマークとなる貴重な研究成果を挙げたこととなります。学位審査がすべて終了し、歴史学・文明学第3課程博士を取得したのは1985年6月、中島先生は32歳となっていました。

3. 京都を経て立教へ 大学教員の時代

フランスから帰国した中島俊克先生は、1986年3月に博士課程を単位修得退学し、同年4月から1年間、一橋大学経済学部の助手となり、1987年4月に京都産業大学経済学部に「欧米経済論」担当の専任講師として着任しました。1989年4月に助教授に昇格した後、1992年9月から1993年6月まで在外研究で再びパリ第四大学に留学します。そして9年間過ごした京都を離れ、いよいよ1996年4月から「経営史」担当の助教授として、立教大学経済学部での教員生活が始まりました。同時に着任したのは、「経済原論 A」の前畑恵子、「景気変動論」の黒木龍三、「近代経済学」の藤原新でした。

1996年当時の経済学部には、「一般経済史」担当の小笠原茂、「アメリカ経済史」の高橋和男、「現代日本経済史」の足田康行、「日本経済史」の老川慶喜、「社会思想史」の小林純、「欧州経済史」の石原俊時（現東京大学教授）、計6人が歴史系教員として在籍していました。中島先生は前年度まで「一般経済史」を担当していた鶴川馨の定年退職を受けて、その後任として採用された形になります。中島先生の着任まで「経営史」を講義していたのは、「経営学」担当の丸山恵也でした。1997年のカリキュラム変更で「一般経済史」が廃止され、歴史系スタッフによるリレー講義「経済史」がスタートします。これに合わせて、中島先生は、老川慶喜ほか編『経済史』東京堂出版（1998年）に編者の一人として名を連ね、全体の調整やスケジュール管理に熱心に取り組みました（第2章「前資本主義経済の特質」、第9章「戦後の世界経済」ほかを執筆）。その後、中島先生は1999年4月から2年間、北川和彦学部長の下で、経済学科長の岩崎俊夫、前期課程主任の服部正治、後期課程主任の松井泰則とともに、経営学科長として学部運営にあたりました。経営学科長を退任後、2001年4月から1年間、大学院時代から数えて3回目の長期海外研究として、パリ第十大学に留学しました。2006年には小笠原の定年退職により、中島先生は「欧州経済史」の担当に移り、「経営史」は須永徳武の担当となりました。

中島先生の大学運営における最も大きな貢献として衆目の一致するのは、全学共通カリキュラムでの活躍です。1998年に発足間もない全学共通カリキュラムに経済学部の言語担当専門委員として選出され、2001年以降、サバティカルの期間を除き、その運営に携わってきました。役職名だけを挙げて、2002～2005年度全学共通カリキュラム専門委員（総合）、2006～2007年度全学共通カリキュラム特別教務委員、2009～2010年度全学共通カリキュラム統合サポーター、2011年度全学共通カリキュラム総合チームメンバー、2012～2015年度全学共通カリキュラム総合チームリーダー、そして2016年度から退職まで全学共通カリキュラム副部長を歴任してきました。立教大学の伝統的理念である「全人教育」を実践すべく、中島先生が全学共通カリキュラムにかけた情熱については、後述したいと思います。

学会活動においても、社会経済史学会、経営史学会を中心に、フランス経済史・経営史の泰斗として重きをなしてきました。社会経済史学会では、1995年1月～2006年12月まで評議員、2007年1月～2018年12月まで理事、経営史学会では1999年1月～2002年12月に評議員、2011年1月～2014年12月に理事を歴任しました。さらに学会の研究活動の中心である学会誌に関しては、『経営史学』編集委員を1997年1月～2000年12月に務め、とりわけ『社会経済史学』編集委員に関しては、2006年1月から2017年12月まで長期にわたり尽力し、その重責を担ってきました。

次に中島先生のこれまでのご研究について、簡単に紹介させていただきます。同じ歴史系分野とはいえ、中島先生はフランス経済史を専門とされ、私は日本経済史を専門としています。その学問的意義まで十分に言及できないことをあらかじめ申し添えておきます。

4. 「森林」の製鉄業史から「都市」の機械工業史へ 研究遍歴をたどって

(1) 製鉄業史研究

中島俊克先生はパリ留学を画期として、製鉄業史から機械工業史に研究テーマを大きく変化させます。製鉄業史に関する論考は、「十九世紀前半のフランスにおける小規模製鉄工場へのパドル炉の普及」『社会経済史学』第46巻第3号(1980年9月)、「19世紀フランス製鉄業発展の特質」原輝史編『フランス経営史』有斐閣(1980年)の2本です。まず修士論文をベースとした論文 について紹介します。論文 の課題は、18世紀末にイギリスで開発された新製鉄技術の一つであるパドル法が19世紀前半にフランスの製鉄業で普及していく過程を追跡することで、19世紀フランス製鉄業の発展がイギリスと異なる独自の方向への変化を含むことを明らかにすることでした。中島先生はフランス商務省鉱山局が毎年作成していた『鉱山局統計』の1835年と1844年に収録されていた「フランス製鉄工場総覧」を検討し、イギリスの新技術が、通説では退嬰的とされてきたフランス東部や中西部の森林地帯の伝統的小規模製鉄工場で相当広く行われていたことを解き明かしました。結論部分では、従来もっぱら木炭製鉄から石炭製鉄への移行の初期段階(1830年代前半まで)の過渡的現象として捉えられてきた森林地帯の小規模工場におけるパドル精錬が19世紀後半まで存続したこと、守旧的と捉えられてきた木炭製鉄地域の経営者が実際には高品質の錬鉄需要の増大という状況に機敏に対応する能力を備えていたことを指摘しています。伝統的要素の存続を単なる「遅れ」とみなさず、新製鉄法と旧来の製鉄技術の結合をめざした点を強調し、そこにフランス製鉄業の特徴を見出そうとする視点は非常に明快です。

次の論文 は、原輝史を編者として、日本で最初のフランス経営史に関する入門書として構想された『フランス経営史』に収められています。ただし、編者の原が「はしがき」で「フランス経営史研究は、現在にいたるまでほとんど未開拓の研究領域だったので、いわゆる教科書

スタイルで本書を編集することはできなかった。……（中略）……そこで各執筆者の専攻するテーマを中心に叙述を進め、場合によっては執筆者の主張を加味しながら問題点を明確化することにした」（i頁）と述べているように、同書は専門の論文集といていい内容です。大学院生だった中島先生は、執筆者の中で唯一の1950年代生まれの最若手でした。論文では、修士論文で対象としたフランスの石炭製鉄技術（パドル法）の定着過程が分析され、19世紀のフランス製鉄業発展の特質が検討されます。学部卒業論文で考察した産業革命の英仏比較を念頭に置きつつ、18～19世紀のフランス経済を停滞的と捉える通説を批判し、同時代の華やかな産業革命期のイギリスのように劇的ではなかったものの、フランスが国内市場の漸進的な進化を踏まえながら、着実に工業国への道を歩みつつあったことが描かれます。

中島先生の製鉄業史を対象とした研究は論文と論文のみですが、統計資料による数量的分析、中小零細工場の地理的分布の確認、二次資料の丹念な分析・整理と読み込み、そして生産現場の「技術」を中心に置く研究手法は、後の機械工業史研究と変わりません。一橋伝統の実証主義に基づき、一つ一つの史実を積み上げて、通説的理解に批判を加える。これが中島先生の基本的な研究スタイルとなっていきました。この点に鑑みると、中島先生の研究に対する姿勢は一橋大学の学部時代に形成されたといえるでしょう。付言すると、論文で対象とした製鉄工場は、40名程度の比較的小規模の工場でした。都市機械工業史においても、中島先生は中小零細工場に着目しますが、イギリス中小企業論を学んだ学部時代の外池ゼミでの経験が先生に強く影響したことがうかがえます。

（2）機械工業史研究

フランスのパリ第四大学への留学を契機に、中島先生は機械工業史研究に転じます。帰国後に博士論文をベースに次々と論文が公刊されていきました。まず「19世紀後半～20世紀初頭におけるパリ機械工業の展開」『土地制度史学』第111号（1986年6月）をみていきます。論文の目的は19世紀後半から20世紀初頭（具体的には第二帝政期から第一次世界大戦前夜まで）のパリ地域における機械工業の展開を明らかにすることです。特に通説では「没落」の側面が強調されてきた世紀転換期のパリ機械工業について、自動車産業の発展に関連させて新たに捉え直すことを目指しました。当時のフランス経済史研究では、機械工業史研究のみ目立った業績がありませんでした。これは生産量・生産額の諸統計や公的機関・組織による実態調査など、産業の全体像を把握する基礎的資料がほとんど無く、また業界団体や労働組合などの刊行物も散逸しているという史料的な制約に起因していました。さらに中島先生が対象としたパリ地域の機械工業は、フランス機械工業の最大の中心地でしたが、中小零細工場が多く、経営史料も残っていない状況でした。中島先生はこの限界を突破すべく、博覧会報告書や商業年鑑などの同時代文献、隣接領域の人口史・社会史で利用されていたセンサスや営業税台帳、破産文書などから機械工業関係の叙述を拾い出し、その全体像を再構成していきました。丹念な実証作業

によって導き出された結論として、パリ地域の機械工業が19世紀前半に形成され第二帝政期に急成長した手工的熟練に大きく依存し、その後の展開を強く規定し続けたことを中島先生は指摘します。そして、パリ機械工業がこの手工的熟練に依存した生産構造からの脱却に苦しみつつ、他方でその利点を生かして、「ベル・エポック」期の繁栄がもたらされたことを明らかにしました。

続いて発表された論文が「19世紀パリ機械工業における技術変化と技能養成」『社会経済史学』第52巻第6号(1987年2月)です。論文において、中島先生は、第一次世界大戦以前のフランス、特にパリ地域の機械工業の発展を論じましたが、この論文では、19世紀~20世紀初頭のパリ機械工業における労働過程の変化と、それに伴う作業管理、労働力陶冶機構形成のプロセスを検討します。技術教育・職業訓練に関する教育史の成果と中島先生ご自身の機械工業史の成果を結びつけることによって、教育・訓練機構の整備に合わせて進展したパリ機械工業における生産構造の変化が描かれます。中島先生は、パリ機械工業の生産構造に手工的技術が組み込まれていたこと、熟練労働者の養成は伝統的な機構を基幹としつつ、国立工芸院の夜間講座や製図教室、私塾が補完していたことを示します。こうした伝統的要素と近代的要素の巧妙な組み合わせがフランス機械工業の基礎となったものの、他方で伝統的要素への強い依存が、機械工業の新たな技術段階に見合った量の新型熟練工を養成する労働力陶冶機構の確立に立ち後れたと結論づけます。

次の「第二帝政期におけるパリ機械工業の繁栄」『一橋論叢』第97巻第3号(1987年3月)は、論文で十分に言及できなかった第二帝政期(1852-1870年)のパリにおける手工的熟練に立脚した中小機械工場の繁栄を論じたものです。ここで中島先生は、パリ郊外で機関車製造などを行っていた大規模機械工場が市内東部の中小機械工場に熟練工調達や部品加工等で強く依存していたことを明らかにします。中島先生の表現を借りれば、「大工場は、中小工場の大海に点々と浮かぶ島」でしかなく、分厚い中小工場の存在がフランス機械工業の核となっていたことが示されます。博士論文の対象時期は1847年から1914年までで、この論文により、留学時代の成果については一つの区切りがつく形となりました。

1990年代以降、中島先生は、第一次世界大戦以降のパリ機械工業に関して、時代を少しずつ下りながら論文を発表していきます。まず“L’impact de la guerre de 1914-1918 sur l’industrie mecanique de la Region Parisienne,” *Histoire Economie et Societe*, 12e annee, numero 4, mars 1994では、パリ機械工業の技術・組織革新に対する第一次世界大戦の影響を論じています。中島先生は論文において、総力戦下のパリ機械工業が砲弾や大砲、小型武器などの大量の軍需に対して、作業組織の合理化を進め、旧来の生産構造を労働集約的に柔軟に再編して対応したこと、標準化などの試みもみられたものの、限られた規模の生産ではアメリカ的生産システムの導入は不完全に終わったことを明らかにしました。そして、軍用の車両や航空機の分野で目覚ましい技術的進歩を遂げた一方、軍需品への傾注は工作機械生産を犠牲

にしたため、工作機械は対米依存を強めることになったと指摘します。結論として中島先生は、第一次世界大戦を契機として、戦争前から進んでいた一部の大企業が発展を加速させた一方、生産構造を柔軟に組み替えて対応したパリ機械工業の基本的構造は変化せず、全体としてみれば、1920年代に技術面、構造面での近代化という新たな課題に直面することになったと結んでいます。戦争を画期とする「連続と断絶」は、経済史に限らず歴史学にとって常に関心を集めてきた議論です。中島先生は第一次世界大戦の影響を慎重に検討し、軍需の急拡大がパリ機械工業の構造を変質させるまでには至らず、フランス機械工業の力強く柔軟な対応力が抜本的な近代化を阻む「桎梏」となった点を強調します。この指摘は、第二次世界大戦後の日本機械工業発展の前提として、戦時期の生産管理の進歩や産業構造の変化を議論してきた日本経済史にとっても、貴重な示唆を与えるものといえるでしょう。

続いて中島先生は、“*Crise et croissance de l'industrie mecanique de la Region Parisienne (1918 1939)*,” Michele Merger and Dominique Barjot, eds., *Les entreprises et leurs reseaux : hommes, capitaux, techniques et pouvoirs XIXe XXe siecles*, Paris, Presses de l'Universite de Paris Sorbonne, 1998で、両大戦間期のパリ機械工業の危機と成長を取り上げました。この論文は、恩師のフランソワ・キャロンがパリ第四大学を退職する際に編纂された記念論文集に寄稿されたもので、その目次に並んだ執筆者を見れば、フランス歴史学界におけるキャロンの貢献が一目で理解することができます。論文 タイトルの“危機”とは、パリ機械工業が第一次世界大戦期に軍需生産に傾斜した結果、1920年代から1930年代前半に生産転換に苦しんだことを意味し、“成長”とはナチス・ドイツに対抗する再軍備の進展により、1935年前後から活況を呈したことを指しています。中島先生はまず、統計的な概観を試み、フランス全体に占めるパリ機械工業の地位を量的に観察し、その重要性が変わらなかったことを明らかにしました。続いて、1918～39年におけるパリ地域における中小機械工場の技術革新について、原動機や各種産業用機械、工作機械などの製品別に主要企業の発展を検討します。興味深いのは、第一次世界大戦の負の遺産であった軍需品生産に対応した生産設備や生産ネットワークが、両大戦間期の危機の要因となった反面、再軍備開始により一転して活力源となったことです。このことがパリ機械工業、さらにはフランス機械工業にどのような意味を持ったのか、また特に量産技術の確立という点でどのような限界を有したのかについては、ドイツによる占領を経て、第二次世界大戦後の成熟期を検討した論文 に引き継がれていきます。

そして10年ほど間隔を置いて発表されたのが、「パリ機械工業の再活性化とその限界、1939～1958年」『社会経済史学』第74巻第5号（2009年1月）です。ここでは、第二帝政期（論文 ）、20世紀初頭の繁栄（論文 ）に続き、成熟期ともいえる第二次世界大戦直後から1950年代のパリ機械工業が描かれます。多様な製品と柔軟な生産構造を特徴とするパリ機械工業は、ドイツ占領期と戦後混乱期を経て、1950年代初頭をピークとする好況を謳歌しました。中島先生は、この時期の繁栄を、パリ機械工業が西側世界全体への生産財供給の一翼を担いな

から、耐久消費財の急増という事態を受けて次の時代に向かったの“模索”を続けた時期と捉えます。この“模索”は“可能性”とも言い換えることもでき、奢侈的金属加工業の伝統に連なる独自の生産体系を進化・成熟させることで、戦後初期のパリ機械工業には様々な未来が広がっていたと、中島先生はその強みを主張します。しかし、最終的には、西ドイツ機械工業の再建が軌道に乗り、地域間分業関係が世界的に再編成される過程で、パリ機械工業はフランスの自動車・航空機産業を中心とする産業地域の再編の中に組み込まれ、パリ市内東部の雑多な中小工場は消え去り、現在では街角のガレージなどに名残をとどめるに過ぎなくなってしまいました。中島先生は、労使関係や取引関係の透明化をもたらした産業構造の近代化を評価する一方で、町工場としての柔軟性、多能性が失われ、現在のフランス機械工業におけるメカニクス系技術の「足腰」の弱さにつながったと結論づけます。論文の末尾で、中島先生は「水清ければ魚住まず」の故事を引いて、雑然たる雰囲気の中で活気に満ちていた往時のパリ町工場の世界を表現します。東京の大田区や東大阪など、日本の場合も集積された雑多な町工場が機械工業の競争力の源泉となってきました。安易に1950年代のフランスと現在の日本を比較するのは避けなければなりません、現場の職人の手工的熟練に支えられた「モノづくり」の意味を考える上で、この論文は現代的な意義を有しているように思われます。

パリ機械工業に関する通史的研究の最後となるのが、“French economic plans and the mechanical engineering industry in the Paris region, 1953 1974,” Patrick Fridenson and Dominique Barjot, eds., *France Japon, regards croises : Melanges en l'honneur de Terushi Hara*, Paris, Presses de l'Universite Paris-Sorbonne, 2015です。この論文は、論文の結論部分で言及した都市機械工業とフランスの産業政策（計画経済）との関係について、1944～74年のフランス経済「栄光の三十年間」を中心に論じたもので、中島先生が研究対象としてきた伝統的な金属加工業に立脚したパリ市内東部の中小零細工場の「終焉」が描かれます。中島先生は、実態を無視したフランス政府の誤った産業政策によって、この間にパリ機械工業の競争力の源泉であった工場間のネットワークや熟練工に体化した高度な手工的技能が失われていったことを、「古き良き時代」への惜別の辞のように淡々と実証していきます。論文により時期としては、第一次オイルショック前後まで到達し、博士論文から数えれば、およそ130年間のパリ機械工業を論じたこととなります。なお、この論文は、2011年に急逝した原輝史の追悼論文集に収められたものです。この追悼論文集は、ドミニク・バルジョ (Dominique Barjot, パリ第四大学) とパトリック・フリダソン (Patrick Fridenson, 社会科学高等研究院) の呼びかけで、2013年8月にパリで開催された原輝史先生追悼セミナーを契機としてまとめられたものです (矢後 [2013])。セミナーにおいて中島先生は、第一部「カルテルと産業政策の研究者としての原輝史」でパリ機械工業について報告し、セミナーに参加した矢後和彦 (早稲田大学教授) によれば、中島先生は「原先生が生前に強調されたフランス経済のカルテル (アンタント) 体質にも言及され、原先生の着想が今日の国際的な研究水準に

継承されることを示して一同に感銘を与えた」とのことです（矢後 [2013], 72頁）。キャロンを中島先生に紹介した原の追悼論文集に、先生が半生をかけて取り組んできたパリ機械工業史研究の一つの区切りとなる論文が掲載されたのは偶然だったのかもしれませんが。しかし、歴史家としてはその偶然に必然を見いだしたいようにも感じます。

さて、中島先生は、パリ機械工業に関して、以上みてきたような主軸といえる諸研究のほかに、論点を掘り下げたいいくつかの論考を発表しています。“Les machines françaises aux expositions internationales 1851 1911,” *KSU Economic and Business Review*, No. 14, May 1987は、論文を補完する形で、第二帝政期にパリで開催された世界博覧会におけるフランス製の諸機械を分析したものです。「黒い旋盤工：フランスにおける北アフリカ系労働者の社会的上昇」佐藤清隆・中島俊克・安川隆司編『西洋史の新天地：エスニシティ・自然・社会運動』刀水書房（2005年）は、一橋大学大学院時代の恩師である浜林正夫の傘寿を記念した論文集に寄稿されたものです。中島先生は編者の一人として、出版企画書の段階から携わり、15人からなる執筆者のとりまとめに尽力されました。この論文では、論文とで言及したフランス機械工業における北アフリカ系移民労働者を取り上げています。「フランス自動車部品工業の発展と国際競争：グローバル化の進展と政府のかかわり」湯沢威編『国際競争力の経営史』有斐閣（2009年）は、現在のフランス経済の屋台骨となっている自動車産業を通して、国境を越えた生産の最適化の動きと産業政策の役割を検討した論考です。

「形成期フランス機械工業の技術的特質 イギリスと比較して」竹岡敬温ほか編『新技術の導入 近代機械工業の発展』同文館（1993年）は、1990年7月に開催された社会経済史学会近畿部会夏季シンポジウム「機械工業における新技術の導入と開発」を基礎にした論文集の中の一編です。また「祖国を棄てた技術者：ジョン・ホルカーと英仏産業革命」浜林正夫・神武庸一郎編『社会的異端者の系譜』三省堂（1988年）は、イギリスからの亡命技術者によるフランスへの繊維機械も含む繊維工業に関わる技術移転を論じたものです。これら論文は、いずれもイギリス産業革命との関係史・比較史的な視点でまとめられており、中島先生が19世紀までのフランス経済、産業技術をどのように捉えていたのかを知ることができます。

第二次世界大戦後の日本における農業機械工業をめぐって久保田鉄工所（現クボタ）を事例に論じた“Post War Growth of Agricultural Machine Production : The Case of Kubota Ironworks,” Takeshi Yuzawa, ed., *Japanese Business Success : The evolution of strategy*, London, Routledge, 1994は、フランス経済史を専門としてきた中島先生の研究業績の中では異色の研究です。この論文が収録された *Japanese Business Success* は、米川伸一の遺暦を記念して刊行されました。同書は、日本企業の経営や戦略を「日本的経営」として過度に単純化せず、個別企業のケーススタディを通して、その多様性を明らかにするという統一された課題・視角で企画されたものです。編者の湯沢威によるこの企画意図に沿って、中島先生が選んだのが、日本を代表する機械工業地域「大阪」をバックボーンに発展した久保田

鉄工所でした。ここでは対象が日本に移っていますが、中島先生の基本的視座はこれまでと変わらず、パリに代わって大阪を舞台とした議論が展開されます。経済史・経営史で未開拓の領域に切り込んだ論文は学界にとっても貴重な財産といえます。

最後に2018年2月23日、11号館A203教室において開催された最終講義「フランスの森と水車」を紹介して、本節を終えたいと思います。この最終講義は、2017年度に大学院博士課程前期課程（修士課程）の講義「欧州経済史特論」で輪読したフェルナン・ブローデル『フランスのアイデンティティ』論創社（2015年）への言及から始まり、森林史の重要視を説く「森の話」、水力エネルギーの歴史を通して水車の技術史を振り返る「水車の話」と続き、中島先生の深い教養に基づく歴史家としての視点から、フランスの風土と産業技術の関わりについて議論が進められました。近年、中島先生は「フランスにおける環境史研究の動向：社会経済史の観点から」『社会経済史学』第73巻第4号（2007年11月）などを通して、歴史研究における環境史の重要性を強調してきました。産業技術の発展におけるイギリスともドイツとも異なるフランスの独自性は、どのような要因によって生じたのか。この問いに対して、中島先生は、フランスの自然地理的な条件や歴史的伝統に着目し、それらを背景に展開した生産活動と自然との柔軟な関わりに解答を求めます。本節では主に中島先生が「森林」の製鉄業史から「都市」の機械工業史へと研究の方向性を転換したことをみてきました。しかし、この最終講義を踏まえれば、中島先生の根底には、「森の国」フランス（ガリア）という意識が常にあり、再びそこに回帰していったことがうかがえるでしょう。

以上、駆け足で中島先生の40年を超える研究の遍歴をたどってきました。フランス経済史研究を軸に置きながらも、一つの学問領域には収まらない中島先生の視野の広さ、大胆な構想力、そしてそれらを裏付ける高い実証力には、同じ研究者として感嘆せざるをえません。

5. 全学共通カリキュラムを支えて 専門人から教養人へ

中島俊克先生は、立教大学の全学共通カリキュラム（以下、全カリ）に全身全霊をかけて取り組まれ、中核メンバーの一人として、立教大学の財産である全カリを支えてきました。中島先生は退職にあたって、全カリ運営センターの紀要『大学研究フォーラム』に「全カリという奇跡」という一文を寄稿しています。この中で中島先生は、全カリが専門教育の充実を求める社会の要請と立教伝統の「全人教育」の理念との間の激しい葛藤のなかから「奇跡」のように生まれたものと振り返っています。この奇跡を生んだ背景として、中島先生は、1991年の大学設置基準大綱化を受けて、立教大学がいち早く学士課程教育の目標を従来の「教養ある専門人の育成」から「専門性ある教養人の育成」に転換したことを挙げ、この転換を英断として高く評価します。この転換の最大の成果が全カリということになりますが、長く全カリを支えてきた中島先生の実感としても、「(過度に)教育熱心な一握りの教員が、周囲に温かく見守られな

から、……（中略）……無限の労働投入で支え続けている一つの運動体である。神輿の重さが肩に食い込んでも、祭りの興奮から担ぎ手は痛さを感じないようなもの」（中島 [2018b], 66頁）と表現するほど、全カリは教員に想像以上の負荷をかける壮絶な教育上の取り組みでした。「(過度に) 教育熱心な一握りの教員」の一人として、「無限の労働投入」で中島先生が全カリを支え続けてきた理由はどのようなものだったのでしょうか。一つの回答として、研究者と教育者の2つの面をもつ大学教員のあり方について述べた中島先生の「思い」を少し長くなりますが引用しておきたいと思います。

大学教員は研究者であると同時に教育者でもある。ことに立教大学では専任教員は、自分の学部の学生だけでなく全学部・全学年の学生に対し、教育責任を負っているのである。4月に胸をときめかせて教室に入ってくる新入生たちに、冷たい専門研究の成果を投げ与えるだけで、本当に教師は満足できるか。そうして得たわずかな時間を研究に向けたとして、どれほどの研究成果が得られるというのか。専門教育のカリキュラム体系の中では個々の講義に盛り込める内容に制約があるため、教員にとっても学生にとっても、それは退屈なものになりがちである。むしろ自由にテーマを選び専門の違う学生たちに講義する、全カリの教室での学生との共感の中にこそ、新たな研究の種が発見できるのではないか。

(中島 [2018b], 66頁)

この中島先生の「思い」からは、研究と教育が決して二者択一なものであったり、どちらかを重視したりするものではないという、我われ立教大学の教員に対する激励が痛切に伝わってきます。この激励をどのような形で受け止めていくのか。中島先生が去った後の私たちは常に自問自答しつつ考えていかなければならないと思っています。

結びにかえて

中島先生が1996年4月に立教大学に着任した頃の経済学部は、経済学科と経営学科の2学科体制で、1学年1,000人余り、4学年合計で4,000人を超える巨大学部でした。中島先生が担当した通年科目の「経営史」は、1,000人を超える履修者を数え、4月の学期初めの頃は、配当された9号館大教室には入りきらず、教室からあふれ、9号館1階のピロティまで学生が列をなしているような状況でした。もちろん教室外の学生には中島先生の声は届かず、レジュメが講義開始の30分後に回ってくるような有様です。5月のゴールデンウィーク明けには、おおよそ200人程度が毎回出席するようになり、こうした混乱も収まっていきました。

まさに長らく日本の大学で批判されてきたマスプロ授業そのものでしたが、中島先生は当時珍しかったインターネットを利用して、この問題を少しでも解決しようとしました。現在、立

教大学では教育支援システムの Blackboard が広く利用されていますが、こうしたサービスが検討すらされていない中で、独自の WEB サイトを立ち上げて、講義レジュメや参考文献などを提供していました。もちろん現在よく利用されている文書フォーマットの PDF も一般に広まっていない時代です。レジュメもテキストベースで HTML 言語により公開されていました。その他にも、経済学部最初の独自サイトの立ち上げなどにも関わり、40代の若き中島先生は、経済学部において ICT の先端を走っていた教員の一人でした。当時、経済学部は3号館にありましたが、建物自体が非常にクラシックな雰囲気、広さも現在の12号館の研究室の半分程度でした。学部時代の私もよく3号館の研究室を訪ねていましたが、狭い研究室内に窮屈そうに古い洋書や専門書が積み上げられている中、最新の PC とモニターが置かれているという対照的な情景を、今でも懐かしく思い出します。

教育活動において最新のツールを使いこなす中島先生でしたが、私が今でも忘れずに強く記憶しているのは、先生と読み進めた古典輪読です。私が留年2年目で余裕がありそうだとすることもあったのかもしれませんが、1998年に私は中島先生から大学院講義への参加を勧められました。講義には、現在、ビジネスデザイン研究科（経営学部）教授の山中信彦先生も大学院生として参加されていて、3人でシュンペーター（Joseph A. Schumpeter）の『経済発展の理論（第二版）』（*Theorie der Wirtschaftlichen Entwicklung, neubearbeitete Aufl.*, München ; Leipzig : Duncker & Humblot, 1926）の英訳版を読み進めることになりました。塩野谷祐一らによる有名な邦訳（『経済発展の理論』上・下、岩波文庫、1977年）もありましたが、自力で四苦八苦しながら和訳して、レジュメを作り、発表する作業を繰り返しました。講義では、中島先生ご自身はドイツ語の原著を傍らに置いて、単語レベルでドイツ語版と英語版の違いを我われに説明しつつ、本当に一行一行解説を加えていきました。中島先生は「こういう時代だからこそ」（中島 [2017]）という小論の中で、「とにかく古典に深く学ぶことが、こういうあわただしい時代には、何より必要なのではないか」と古典の重要性を語っています。本稿においても、中島先生が一橋大学の学部時代から、英語、フランス語の古典に親しまれてきたことを触れてきました。あのゆっくり流れる時間の中で古典を読み進めた経験が私を研究者の道に誘ったとすれば、私自身がそれを次代に伝えなければと強く感じています。

さて、中島先生を語る上で欠かせないのは、お酒にまつわるエピソードです。私自身、中島先生とは数多く酒席をともししてきました。博覧強記の中島先生は座談の名手です。そもそも文系の大学教員は、一度話し出すと話が止まらないものですが、中島先生は学問論から大学論、様々な話題に対応しながら、常に場の中心で語り続けていたことが記憶に残っています。そして話が弾めば弾むほどお酒も進んでいくこととなります。とはいえ、「お酒好き」と「お酒に強い」は、必ずしも一致しません。私自身が目の当たりにしたり、後日に聞いたりした中島先生のお酒に関する逸話は、大変面白おもしろく、またお人柄を示すものが多々あるのですが、ここでは具体的には言及せず、個人的な思い出として胸にしまっておきたいと思います。ここに

残すべきは、「よく呑まれた」だけで十分でしょう。

学部ゼミ1期生でゼミ長をしていた私の怠慢もあり、中島ゼミはOB・OGや現役生による先生を囲む会を定期的実施してきませんでした。2013年12月に還暦のお祝いの会、2018年2月の最終講義に合わせた定年退職のお祝いの会を開くことができました。1996年度の1期生から2018年度の第22期生まで、中島ゼミの卒業生は240名余りになり、多くの有為な人材を社会に送り出してきました。卒業生の中で、私を含めて2名が経済史の研究者となり、大学で教鞭をとっています。また直接の教え子以外にも、中島先生は学会等で分け隔て無く、他大学の大学院生や若手研究者に積極的に声を掛け、報告に対して真摯に質問・コメントを行い、後身の研究者育成に心を砕いてきました。

中島先生は「私が専攻する経済史というのは、陸上競技に例えると短距離走よりはマラソンに近い分野で、研究を持続することが重要」（中島 [2018b], 68頁）と語っていますが、ご壮健な中島先生の研究者としての歩みは、まだまだ止まることがないと思います。パリ機械工業史についても、中島先生曰く「先を急ぐあまり駆け足になってしまった」ため（中島 [2018a], 5頁）、第二次世界大戦期から戦後復興期については、再度立ち返って研究を進める予定とのこと。中島先生のご退職は、教育者としてのひとまずの区切りでしかありません。ご退職後、奥様とご一緒に京都に移られたため、中島先生の警咳に接しにくくなったことだけが個人的には残念ですが、中島先生の一家言ある鋭い舌鋒は、京都での酒席や学会の全国大会等でこれからもうかがえると信じています。これまで中島先生から賜った学恩とご配慮に対して、深い感謝を申し添えて、この「人と学問」を終えたいと思います。

参考文献

- 中島俊克 [2017] 「こういう時代だからこそ」『大学教育研究フォーラム』第22号。
- 中島俊克 [2018a] 「経済史への想い 私の修業時代」『立教経済学論叢』第85号。
- 中島俊克 [2018b] 「全カリという奇跡」『大学教育研究フォーラム』第23号。
- 矢後和彦 [2013] 「原輝史先生追悼セミナーに参加して」『早稲田商學』第435号。